

1 はじめに

本校は今年度より、NIE教育実践推進校として指定を受けた。NIEについての意義など、我々教師側の認識としては「壁新聞をつくる」、「授業で新聞を活用する」など誤ってはいないものの、浅い認識でしかとらえられていないところもある。今年度の取組としては、『無理のないNIE』、『生徒のためになるNIE実践』を念頭に置いた。来年度より中学校の学習指導要領が全面移行されることに伴い、「言語活動の充実」を図ることが各学校で求められる。その中で、NIE教育の果たす意義は大きいですが、各教科だけによらず、生徒の身近な教育活動においてNIEを取り入れることで、『無理のないNIE』の実現に向けた取組を重点的に行った。具体的な実践内容は以下に述べさせていただくが、今年度の取組をベースに、来年度さらに本校のNIE教育が発展されていくことを目指している。

2 主題設定の理由

今年度の実践に取り組む上でまず考えなければならなかったことは、新聞がどのくらい生徒の身近にあるかということであった。そこで、3年生を対象に簡単なアンケートを作成し、実施した。結果については、右に挙げたとおりであるが、結論として、「毎日新聞を読んでいる」、「新聞を見るのは、テレビ欄である」と回答している生徒が圧倒的に多いということである。新聞から読み取れる世の中で起こっているさまざまな出来事や、それについての論評など、新聞が出している

本来の意図とはかけ離れた状態に生徒がいるという事実と直面した。そこで、まずは生徒が新聞を身近なものとしてとらえることができるような実践に取り組もうと考え、この主題を設定した。また、親しむだけでなく、記事から内容を読み取り、自分なりの考えを打ち出すことができる生徒の育成を図ろうとすることを目標として、この主題を設定した。

3 実践内容

(1) 第3学年 学級における取組

○「学級日誌」を活用し、新聞記事に目をとおして、それに関する自分の考えを述べる。

(2) 第3学年 社会科の授業における取組

○社会科公民的分野において、新聞記事を活用した授業実践

(3) 第3学年 壁新聞の作成

4 具体的取組

(1) 第3学年 学級における取組

学級では、日々日直活動や週直活動を当番制で行っている。この活動では、帰りの会終了後に、教室の整理整頓と平行して「学級日誌」を記入するということが、どこの学校でも行われていることである。今年度、2学期から第3学年を対象に、学校に1部ずつ新聞が配付されるようになった。ただ教室に配付をするだけでは、目を通さない生徒も出ることが予想されたことから、ま

ずは全員が新聞に目を通す時間を設定することが、主題にもつながる大事なポイントとなった。第3学年の学級担任全員にお願いをして、「学級日誌」に、新聞を読んで気になる記事、その記事について自分なりの感想を書くということを取り組ませた。はじめた当初は、スポーツ欄にかたよるなどの傾向もあったが、時間が経つにつれ、社会・政治・経済といった分野の記事も目立つようになった。また、実際に新聞を読むことも時間をかけて行うようになっており、休み時間に新聞を読みながらあれやこれやと話をしている生徒や、記事だけではわからないことを質問する生徒も出てきた。

【女子生徒の日誌のコメント】

東日本大震災を受け、子ども向けに地震教室を開くということ、宮崎科学技術館がしていた。地震と津波から身を守るため、震度1以上の地震を体験させたり、地震について説明するのは、良いことだと思った。避難訓練の大切さがわかった。

(1/30 宮崎日日新聞の記事を読んで)

【男子生徒の日誌のコメント】

今日のnews・・・今の若者の財布は、長財布が多くなっている。理由はファッションだそうだ。財布の中にはカードやスマートフォン、マックのポテトにかけて食べる粉など。財布が財布じゃなくなっているような・・・。ちなみに自分は、小さい財布の方が好きだ。

(2/17 日本経済新聞の記事を読んで)

(2) 第3学年 社会科の授業における取組

ア 単元名 「地方公共団体の役割」

(公民的分野の内容)

イ 単元の目標

飲食店を営業するために、地方公共

団体から許可が必要であることを考えさせ、地域住民の安全を守るための仕事をしていることを理解させる。

ウ 本授業での新聞の活用方法

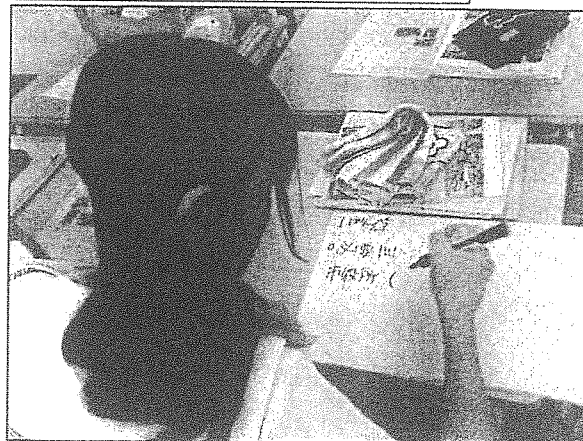
新聞記事を活用し、「飲食店の営業許可の取り消しを行ったのはどこか」という問いに対して、新聞記事から読み取る活動を行った。最初は1人1人新聞の読み取りから入り、途中グループ活動を取り入れ、グループごとに発表をさせた。

○ 授業で使った新聞記事

(朝日新聞 2011年9月1日)



○ 授業の様子 (グループ活動)



エ 事後研究会

授業終了後、事後研究会を行った。この研究授業は、本学園の校内研修の一環として行われたものであり、中等部だけでなく、初等部の先生にも参観してもらい、授業の感想や協議などを行った。新聞活用についての意見としては、「新聞記事を忠実な形で生徒に見せたのはよかった」、「記事の内容を読み取ることができていた」など肯定的な意見が出てきた。しかし、「生徒の実情に照らして、もう少し丁寧に記事をクローズアップしたほうがわかりやすかったのではないか」、「新聞記事の読み取りの時間を十分確保するべきである」などの意見も出てきた。

(3) 壁新聞の作成

① 作成の目的

卒業を前にした3年生に声をかけ、1年間自分たちがどのようなことをがんばったのか、新聞としてまとめようとの考えから新聞作成に取り組んだ。

② 活動の流れ

ア メンバーの決定

3年生に呼びかけを行い、女子生徒6名を選んだ。入試前ということもあり、考慮に入れた。

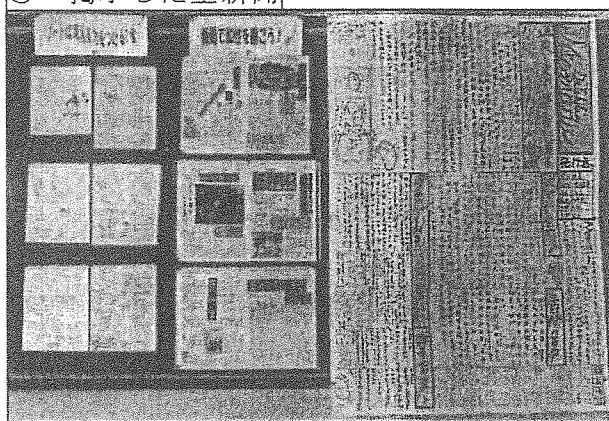
イ 作成にあたってのミーティング

作成前に2回ミーティングを行った。まずは、「新聞の書き方」について、見本をみせることや、【壁新聞の手引き】という資料を活用して、共通理解を図った。また、記事にする行事などの精選、だれが何を書くかなどの役割分担を行った。

ウ 壁新聞の作成

作成の期間は約2週間だったが、1年間で取り組んだ行事の紹介だけでなく、自分たちなりの考えを盛り込んで記事を書くことができた。見出しなどにも工夫をこらし、丁寧に仕上げることができた。作成にあたった生徒の感想としては、「自分たちが取り組んだ行事を振り返ることができてよかった」、「きれいに仕上げることは大変だったが、終わった後は充実感があった」など、一生懸命活動した様子が伝わるものであった。

○ 掲示した壁新聞



5 成果と課題

(1) 成果

主題にせまるような取組を行うことができ、生徒が新聞を気軽に読むことができるような環境をつくることができた。

(2) 課題

授業実践については、より多くの実践を行うことをとおして、より新聞活用の意義が深まるよう取り組む必要があった。

壁新聞作成については、学年だけでなく、学校全体で生徒会の企画として取り扱うことで、盛り上がると感じた。